
幸せの木と狂った世界と。

火野村祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの木と狂った世界と。

【NZコード】

N8440Z

【作者名】

火野村祭

【あらすじ】

死と生が繰り返される場所、ハッピーツリーの街。

狂った人々が住むその街に紛れ込んだのは、1人の“国”だった。
国擬人化作品・ヘタリアと、アメリカンングロアニメ・Happy Tree Friends 擬人化の、クロスオーバー。

ハッピーランチのおせなつ

むかしむかし、『ふじかとおべのまねのやひの、ふじののかな
わがすんだ』いました。

ふじのかみをまがわらのりべにこるやのまちでは、とてもふじ
なことが、まことにわまこにわおじつてこました。

『ね、『ぬよよ、『ぬよよ、みんな。わたしのかこど。』』

ふじのかみをまなげきました。そのあいだも、まちでせんせ
わがくりかえわれてこました。

『ふじのままにはこけない。わたしになにかできぬふじはなこだれい
か。』

ふじのかみをまかんがえました。ふじのかみをまがみおひし
たまちでは、きよつもだれかがしんでいました。そして、しんだひ
とのたにせつなひどが、なみだをながしてかなしんでこました。

『やうだ。しななければこいのではないか?』

かみをまはおもこつきました。

かみをまはふじのかみをまだから、ふじのをなくすじせだわせ
せん。

だから、ふじのひじにしあわせがあればこことおもつたのです。
だれかがしねば、だれかがかなしむ。それが、『ふじ』ならびに、し
ななければ、『しあわせ』なはずだと。

かみをまは、わたくしのじつふじのひつきました。

そのまちのまんなかに、ハッピーランチとこく、『しあわせ』をよ
ぶ木をつくりたのです。

『これでみんなしない。これでみんなしあわせだ』
かみをまはやうつてわらこました。

つまひかり、ハッピーランチのおかげで、みんなはしなくなり
ました。

ふじのがなくなることはありませんでした。みんなみんな、ふじの
にありて、まいにちとてもつらこねむこをするのせ、かわるいひとは
あつませんでした。

でも、しななくなりました（・・・・・・・・）。
だって、もし、だれかがしんなり、けがをしたりしても、ハッピー
ツリーのおかげで、いきかえる（・・・・・）ことができるのはよつこ
なったのだから。

ひどいとは、そのことを「ふきみ」におもこました。

ハッピーツリーをきつてしまえば、そのようなことはなくなるかと
おもこましたが、ダメでした。むへ、おちじゅうび、ハッピーツリ
ーの根がはつていたからでした。

やがて、そのまちはくらつたひどいしかいなくなりました。
そして、そのまちはやがてまほりしどとなりました。

そのまちは、まちのひどいととども、いまもどりかにんさんぞこつ
てこるやうです。

そして、さよのまちでは、『ふじの』と『しあわせ』がぐり
かえされているやうな。

ハッピーツリーのおはなし　　おわり

ハッピーライフのおはなし（後編）

やつひめこおしたへタリア×ハッピーライフ…！
あ、ひらがな多くてすみません…読みづらっこですよね…。
次の話から本編です。よろしくお願いします。

その1 不幸に逢つた日（前書き）

本編始まります。やつそくひょつと痛い描[画]あるので、注意へタリアの世界から始まります。

その1 不幸に逢つた日

子供のころ、変な童話を聞いたことがある。

『ハッピーツリーのおはなし』、という童話だ。

とても短い話だったけど、幼い俺にとってそれはトラウマ以外の何物でもなかつた。

不幸の神様の創つた“ハッピーツリー”は、死んだ人々を生き返らせる不気味な力をもつていて、それはやがて狂人ばかりの街を作つた。その街は幻となり、今でもどこかに存在するらしい。という、童話にしてはえぐすぎる内容だ。今思えば、こんな話を作ったやつを探し出して殴つてやりたいぐらいだ。

教訓らしい教訓も見つからぬこの童話はほんとに童話なのかと疑つてしまふほどだ。

もしかして本当の話かもと考えたこともある。が、ありえないとすぐ片付けてしまった。

けど、まさかあんな形で、事実を知ることになるなんて、俺は思つてもみなかつた。

*

「アメリカ、これから飯にでも行かないか……つて、アメリカ？大丈夫か？」

「つえ！？な、なんだいイギリス。ヒーローは居眠りなんてしてないんだぞ！」

居眠りしてたんだな…。トイギリスは呆れ顔になる。世界会議が終了して数分たつた今、もう窓の外は暗くなっている。会議場に残っている人（？）もごく少数になつていた。

「てかほんとに大丈夫か？顔色悪いぞ、お前」

「あー、うん…最近どうも、夜寝付けなくてね。寝不足気味かも」
アメリカはそう言つと、大きなあぐびをひとつする。彼の目の下には、うつすらとクマができていた。

「原因はわかんねえのか？」

「わかつてたら、とつくに快適な睡眠ができるだろうね。二二二
週間ほど、浅い睡眠しかできていないんだ」

アメリカは眉をハの字にしながら、肩をすくめた。そうか、と言つ
イギリスは心配そうな顔。いい加減俺を心配しまくるのやめてくれ
ないかな、とアメリカは思つた。

「そんなんじやあ、飯とかいつてる場合じやねえよな…そつさと帰
つて寝るよ」

「えー…眠くても食欲はあるんだぞ！イギリスが奢つてくれるな
ら行く…」

「はあー…つたくしあうがねえな…食事中に寝んじやねえぞ」
無自覚ではあるが、未だにアメリカに甘いイギリスは、そう言つて、
行こうと思つていた店までの道順を思い出す。確かに、会議場から歩
いて数分だ。

「ほらいギリス、さつさと行くんだぞ！」

「つるせえ、言われなくても行くつーの…ばあか！」

一人はいつも通り、悪態をつき合いながら、会議場を後にする。
二人はお互いを馬鹿にしながらも、笑いながら歩いていった。

そう、笑いながら

…。

*

「う、あー、それにしても眠いな…」

「だから飯なんて言つてねえで帰つて寝ればいいつつたり
「お腹は空いてるんだから仕方ないだろ！？」

会議場から出て歩いている最中、アメリカはまた大きなあぐびをし

ていた。目元に涙がたまつて、視界が少しづぼやけている。

「歩きながら寝るんじゃねえぞ」

「そんな器用なことしないよ」

そう言うアメリカだつたが、今にも寝そうな顔をしている。イギリスはそんなアメリカを見て溜息をついた。

交差点の前に辿り着いた一人は、道路と歩道の境目あたりで立ち止まる。たくさんの車が行き交っているのを見ながら、横断歩道が渡れる瞬間を待つた。

夜、帰宅時間ということもあり、交差点ではたくさんの人が信号待ちをしている。

アメリカは眠い目をこすって、襲い来る眠気に耐えようとしていた。ふうっとアメリカが息を吐く。同時に、アメリカは背中にどん、と衝撃を受けた。

おそらく後ろの人気が誤つてぶつかってしまったのだろう。そう思った瞬間、ふらり。

アメリカは、眠気のせいで体が弱っていたせいで、当然だが身構えていなかつたために、ふらついてしまった。

それが、いけなかつた。

激しいブレーーキ音と共に、眩しいヘッドライトがすぐそこまで迫つてきているのが、見えた。

「アメリカ！……」

アメリカの全身に痛みが走ると同時、イギリスの悲痛な叫び声が、辺りに響いた。

『おお、かわいそう!』。

幼いころ、童話を読んで想像していただけだったはずの、不幸の神様の声が、聞こえた気がした。

その1 不幸に逢つた日（後書き）

ありがとうございました！

お気づきになつた方もいると思いますが、主人公はアメリカです。それと、この作品では国名呼びで統一します。よろしくお願ひします。

その2 再び死んだ日

「う…ん」

眩しい光を浴びて、アメリカは目を覚ました。寝起きのぼんやりとした頭でも、ここは屋外だとハッキリ理解できた。

しかし、なぜ屋外にいるのだろう。アメリカは目をこすりながら上体を起こし、辺りを見回した。

そこは、見知らぬ公園だった。

多数の子供向けの遊具が設置されている、「ぐく一般的な公園。ほぼ真上に昇っている、太陽の光が差し込んでいる。アメリカは、どうしてこのような場所にいるのか全く分からなかつた。

「わけがわからない…」

アメリカの頭の中は混乱と疑問符で埋め尽くされていた。そして、眠る前のこと思い出そうと、必死で記憶をたどった。

そして、思い出した。

自分はおそらく、死んだ（…）はずだと。

「…え？」

近くまで迫ってきていたトラックのヘッドライト、次の瞬間の衝撃と激痛、イギリスの悲痛な叫び声。すべて覚えていてるのに、なんで俺は今、こんなところにいる？

しかも体は至つて健康体だ。事故に遭う前の眠気だつて、嘘のようにな消えている。

わけがわからなくてアメリカは呆然とした。

すると、公園に小さな子供達が入ってくる。ピンク色のワンピースの女の子と、黄色のパーカーの男の子だ。

子供達はアメリカの方をちらりとも見ずに、まっすぐ滑り台のほうへ行つてしまつた。

無邪気な子供達の声を聞きながら、アメリカはびびりする」ともでき

すに固まつているがまだ。

しばらく、子供達の笑い声をBGMに、頭の中を整理しようと必死になつた。すると、いきなり、エシャツとこひ音と共に、笑い声が悲鳴に変わつた。

٦٦

ああ、カト川ズ！！』

滑り台の上で、女の子が書始めた顔で叫んでいた。滑り台の下では、男の子が頭から血を流して倒れていた。どうやら、男の子が滑り台から落ちたようだ。

を自称する彼にとって、こんな状況をほおつておくわけにはいかなかつた。

「セーラーがトルス、」
女の子は滑り台の上でへたり込みながら、おそらく男の子の名前と思われる単語と、意味を成さない言葉を発しているばかりだった。アメリカは男の子に駆け寄ると、男の子の状態を確認した。男の子の意識はないよつた。頭からは、尋常じやないほどの血がだらだらと流れている。

一大変だ、救急車……！」

アメリカはそう咳くと、自分のジャケットから携帯電話を探す。すると、背後に人の気配を感じた。

同時に、鼻につく甘い匂いも。

「ねー。なにしてんのお?」

その声に振り返ると、そこには、棒付きの飴を咥えた少年が立つて

七
た

黄緑色の髪とパーカーと右目、そして髪飾りのようにくつついてい

る多數の飴。辺りに立ち並む廿二通りには、この少年がもとになつているらしい。

すべてが印象的すぎるあの少年は、ニヤニヤと笑いながら俺を見ていた。

「なに、つて…君にはこの子が見えないとでも言つのかい？怪我してるんだ、助けないと…！」

「はあ？？助ける？？？おじーさんなにこいつのお？？どつかのヒーローじゃあるまじー！」

「でも早く助けなきゃこの子死んでしまうだろーー。」

「は？？？」

少年はとても不思議そうな顔をして首をかしげた。そして、口を開いた拍子に飴が落ちたのも気にせず、俺にこいつを舐めたんだ。

「この街の住人なら、
生き返る、でしょお？？」

…俺は、

その言葉が理解できなかつた。

生き返る？なんのことだらうか。どうこいつだらうか。
頭の中が、ぐちゃぐちゃになつてこく。

「待つて、くれ。どうこうことだい？」

「えー。どうこうことつて、いわれてもなあ。あひやひやひや
「説明してくれよーー。」

「めんべーくさあー」

にやにやと少年は笑い、先程落ちた飴を拾つた。「ーんと考える仕草をしたと思つたら、ぱつと顔を上げた彼はこいつを舐めた。
「実際死んでみれば早いねーー。」

はつと氣付いた時には、俺がここに来る前体験した事故と同じように、暴走したトラックが俺の田の前に突っ込んでいた。

その2 再び死んだ日（後書き）

ありがとうございました！

本編2話目でしたが…やつとハピツリだと思つたらまた事故オチか
ーい！なんてツッコミ入れてらつしやる人もいるんぢやないでしょ
うか。いないか。

ちなみにわかる人はすでにわかつてらつしやると思いますが、女の子
はギグルス、男の子はカドルス、少年はナッティーです。作者は
ハピツリで3番目くらいにナッティーが好きです。
次の話は明日あたりうｐします。

その3 ヒーローに会った日

…い、ろ

…おい、きらつて てるじやな か…

…おい、起きたまえ青年…

「つ…うわあ…？」

ゴン！

「「つてえええ…！」」

アメリカは、頬を叩かれて目がさめたと思ったら、目の前には知らない男の顔があつたため、驚いて飛び起き頭を打つた。もちろん目の前の男の頭で。

アメリカは打つてしまつた前頭部を押さえながら、一体いつ眠つてしまつたのだろうと考えようとするが、うまく頭が回らない。

「いきなり起き上がりないでくれるかな…？せつかく起こしてあげたというのに全く…」

「そ、sorrzy、びっくりしてしまつたんだ」

「氣をつけてくれよ。死んでしまつたらどうするんだ」

男は、水色の髪に赤縁の眼鏡にスース姿だった。通勤鞄らしき物が手元にあつたので、おそらく通勤前なのだろうとアメリカは予想する。

が、そんな予想をしてから、やつと思考が回つてきたアメリカは、はつとあたりを見回した。

先程（？）の出来事が、鮮明に思い出される。

ここは、先程アメリカが死んだはず（・・・・・）の公園だつた。

アメリカは血の氣が引いた。慌てて自分の体をあちこち触つてみる。服も見てみた。が、怪我どころか血の染み一つ無い。わけがわからなくて、アメリカはつい、がばりと頭を抱えてしまった。

「What!? どうなつているんだい！？」

「ん？ どうしたんだそんなに慌てて。なにかあつたのかい？」

男は首を傾げてアメリカを見る。アメリカは、ぱっと顔を上げると、掴みかかりそうな勢いで男に聞いた。

「君、説明してくれないかい！？ この街はどうなつてている…？」

「…………え？」

「ああ……」

男はアメリカの顔を覗き込んで、どうりで見ない顔だと思ったら、と呟いた。アメリカは、自分の背に、嫌な汗が伝うのが分かつた。

「君、こここの住人じやないね？」

男は笑いながらも少し眉をしかめていた。アメリカは頷くしかできない。

男ははあ、とため息をついて少し頭を搔いた。そして、こう言った。

「この街は、ハッピーツリーの街さ。

そう、何度死んだって、生き返る（・・・・・・・・・・・・）。

死ねない街

男は肩を竦めた。アメリカは目を見開いたまま固まってしまった。死ねない街、だつて？

昔、アメリカは、まだ小さい頃、イギリスから童話を聞いた覚えがあつた。

不幸の神様が創った、幸せの木の話。　『ハッピーツリーのおはなし』を。

不幸の神様は、いつもその街の人を不幸にしてしまうから、せめてもの償いとして『幸せの木』　ハッピーツリーを創った。

しかし、結局は不幸の神様が創り出したもの。

それは、とてもいびつな幸せをつくる木。

人々を生き返らせる木。

その木は、その街をだんだんと狂わせていった。

やがて街には異常な者たちしかいなくなり……ハッピーツリーの根が

張っているこの街では、不幸のせいで死んでしまっても、いびつな幸せいでのせいで次の日には何事もなかつたかのように生き返る。街は、

そんな不気味な街になってしまった。

やがて街は幻となつたのだが、今もどこかに存在するといわれている。

が、本当に、あつたとは、思つてもみなかつた。

「嘘だらう……？」

「自分の体に聞けばいいのではないかな？」

「……ッ」

アメリカは自分の胸に手を当てた。

（俺は生きている。）

死んだはずなのに、生きている。

「…………で。

君はどこから来たんだい？

ほんとはそんな体験をする前に帰つてくれたほうが良かつたんだがね……ヒーローが家まで送つていつてあげよつ

その言葉に、アメリカは目を見開いて、ぎゅっと拳を握つた。そして、ゆっくりと口を開く。

「……分からぬんだ」

「え？」

「どうやつて來たのか…分からぬんだ。目覚めたらここにいた」男の表情が消えた。男は何度目かの溜息をついて、頭を抱えてから言った。

「君は…導かれてきたのかも知れない」

「導かれてきた？」

「君は、この街の、新しい住人になるのかも知れない」

「…？」

アメリカは、男の言葉に驚愕した。そして同時に、嫌だと、本氣で思った。

「い、嫌、だ」

アメリカは、ぶるりと震える。

「嫌だよ！こんな街の住人になるなんて！」

「…こんな街、つてねえ、君さあ」

「あ、ごめん」

男の苦笑いに、アメリカは自分の失言に気付く。こんな街でも、彼にとつては愛する街なのだろう。

「やれやれ、まあ私としても、君のよつた純粹な青年をこのよつた街に置いておくのは気が引けるからな」

「え」

「君を家まで送つていってあげよう。ただし、時間はかかりそうだがね」

彼は、にこりと笑つてそう言った。その笑顔と、アメリカにとつての希望の言葉。それはさながらヒーローだった。

アメリカは目を見開いて、その男をただ見詰めるだけだった。

「さて。ひとまず私は仕事に行かなければならぬんだ。

君、名前は？」

「え、ああ。俺は、アメリカ。ヒーローだ」

「君はなにを言つてるんだ、ヒーローは私だよ。

私はスプレンティード。よろしく、アメリカ」

「ああ、こちらこそよろしく」

男　　スプレンティードの差し出された手を握り、彼らは握手を交わした。

少し感動的なシーンは、そんな悲鳴と、それに混じる、狂気的な、高らかな笑い声に邪魔された。

その3 ヒーローに会った日（後書き）

ありがとうございました！

今回はヒーローことスプレンディードが出演しました～スプレンディード大好きなので楽しかったです。

次回は、ヒーローが悲鳴と笑い声のもとへ駆け付けます。わかる人にはもうわかつちゃつたかな…？次回は某人気キャラの登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8440z/>

幸せの木と狂った世界と。

2011年12月27日19時48分発行